

# 解深密經の成立構造の研究 (三)

西 尾 京 雄

## 第五節 分別瑜伽品の構想

一切法相品に於て瑜伽唯識派の教法の根本を樹立し、

無自性相品に於て大乘佛教の淵藪である般若、華嚴の無自性の教説と殊異せるものでなく、其等の不了義の隱密相を了義の顯了相を以て轉法輪したのであつた。こゝに一切衆生の普爲乗教が聞相として安立したのである。それ故に、これより聞持・恭敬して、了義聖教と相應し思相としての瑜伽の觀法が説かれねばならないのである。

扱て、分別瑜伽品の内容は科文<sup>①</sup>の如くであるが、第一遍知、不遍知とは文を科したものでなく、本品の一品に在りて彌勒菩薩が一々遍知せざる問を提起し、それに對して如來が遍知の答を與へたまふ結構となつてゐるに名づけたものであつて品題の分別といふに相當すると見られる。

第二、自性といふも亦文を科したものでなく、題名の瑜伽をいふものである。

そこで、瑜伽 (yoga, mal-hyōr) とは加行 (prayoga, sbyor-la) の義であつて増上戒である。増上戒の加行によつて攝する増上心と増上慧とが瑜伽道の自性である。又、瑜伽とは道理 (rigs-pa) の義であつて四種道理 (觀待・作用・證成・法爾) を指す。この道理に攝する止觀が瑜伽道の自性である。

この二義を攝すれば、増上戒と四種道理とに攝する止觀が瑜伽道の自性であるが、若し増上戒を攝せずしては、その止觀は内の昏沈と見 (dus-ñi, lla-ba) の自性があるから道ではなく、若し四種道理を攝せずしては、その止觀は邪路 (lam-eg-ba) となるから道ではなく、この兩義の存する所に斷と智との圓滿によつて顯はさるゝ無上の

果を得る道があるのである。

第三加行の因には、これより正しく文と相應するものであるが、斷果と智果との所得を目的とする瑜伽道の加行の因について説くのであつて、一所住加行因・二所依加行因・三所緣加行因等である。

第一、所住加行因とは、我々が瑜伽の實修に際して住すべき方便の因を示すのであるが、それは法假安立(dharma prajñapti-vyavasthāpana)といはるゝ十二分教でありその根本教理は三性説であるべきである。

二、所依加行因とは、所依とすべきものであつて、それによつて瑜伽行の目的の不失の因を示すものであるが、それは無上菩提心である。これに依つて、衆生利益は衆生の待つることなく、涅槃を現前することを願はずして無上菩提道に於て加行を爲すことゝなるのである。

三、所緣の加行因とは、正しく斷果と智果との二果を得るについて四種所緣等を説くものである。

第四至得とは、かくの如き加行の因に依止して正しく止觀を得ること、第五至得の方便とは、その止觀を得る

方便、第六失はざらしめんが爲に假を決擇すといはれ、無分別智に住する三摩地を失はざらしめんが爲に、等、十種の瑜伽道に於ける不失義が本師(佛)の假設である教説によつて決擇せられてゐるのである。

以上によつて分別瑜伽品の總義的解説をなし終つたのであるが、此等の教説の中、第三加行因、特に所緣加行因の教説が一品の始終に亘りて樞要を爲すが如くである。

それ故に、先づ講讀に於ける解釋を舉示し、ついで藏傳解説の釋義を繼承する智藏の解釋を引用することゝしよう。

慈尊何故舉<sub>二</sub>斯四種<sub>一</sub>起<sub>レ</sub>問者斯四種<sub>二</sub>所緣能<sub>レ</sub>盡<sub>二</sub>一切止觀<sub>一</sub>境<sub>一</sub>故、

一、有分別影像<sub>二</sub>所緣境事者<sub>一</sub>毗鉢舍那智能觀<sub>二</sub>一切法<sub>一</sub>有<sub>二</sub>差別影像<sub>一</sub>故云<sub>二</sub>有分別影像<sub>一</sub>。

二、無分別影像<sub>二</sub>所緣境事者<sub>一</sub>諸奢摩他影像觀<sub>二</sub>一切法寂然<sub>一</sub>相<sub>二</sub>故無<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>差別影像<sub>一</sub>、即是止觀<sub>二</sub>二法差別也<sub>一</sub>。

三、事邊際<sub>二</sub>所緣境事者<sub>一</sub>盡所有性如所有性<sub>二</sub>盡<sub>二</sub>事理諸法<sub>一</sub>也。

四、所作成辨所緣境事者已得<sup>ナリ</sup>轉依、無上覺者、定慧所照。

於斯所緣境事、問止觀差別一也、斯四種所緣境事盡因果定慧境、故云之徧滿所緣境事、此徧滿所緣境事爲一品修相。初自求善斯止觀終至所作成辨唯是止觀勤修。<sup>②</sup>

次に、智藏の釋に於ては、

〔四種所緣とは〕有分別影像 (savikalpabimba) と無分別影像 (mirikalpabimba) と事邊際 (vastvanta) と所作成辨 (kṛtyānuṣṭhāna) なり。

〔その中〕影像 (bimba, gzuṅs-brñan) とは、相似 (sādṛṣa, hda-ba) といふ義なり。何の影像なりや。心の〔影像〕なり。一切の顯現 (praibhāsa, snan-ba) は實にその〔心の影像〕なるが故なり。

一、所緣に於て前分は有分別影像なり。

二、内に攝するものは無分別影像なり。

三、事 (vastu, dños-po) とは阿賴耶識なり。そこで、所依 (āraya, gnas) と所緣とを有する心心所が因果の事として住するが故なり。その邊を窮盡 (yods-

gr-zad-po) することこそ事邊際なり、轉依・法身といふ義なり。

四、所作成辨とは、自と他との所作を成辨することによつて、一切の所知に於て無著・無礙の智見轉ずることが所作成辨なりと説くものなり。<sup>③</sup>

右の如く、德龍及び智藏の兩解釋を照應することによつて四種所緣の一々がよりよく解明せられるであらう。

次に此等の四種所緣を觀行者の修習次第に應じ、本經の敎説と關係せしめて説きたいと思ふのであるが、それに先立つて、此等四種所緣の中、事邊際所緣について兩釋對照するもなほ明瞭を缺くやうであるから解説の便を借りるであらう。德龍の所釋によれば、事邊際所緣に於て、盡所有性と如所有性が<sup>④</sup>何故に事——智藏によれば阿賴耶識——の邊際 (anta) といはれるのであらうか。

そこで何故に事であるその盡所有性と如所有性に於て邊際といふのであるか。唯、そのみで數の究竟と相 (mūshan-tid) の究竟となるからである。

その中盡所有性とは數である。例へば蘊は五のみであり、其によつて一切の有爲を攝するものである。界

は十八のみ、處は十二のみで有爲と無爲との一切を攝するからである。聖諦は四のみで、其等によつて一切の所知事 (ces-byah-ñhos-po) を攝するものである。

如所有性は相である。盡所有性の其等の相は眞實・眞如にして四種道理と相應するものである。

かくの如く、阿頼耶識の流轉建立の數の一切は盡所有性であり、還滅建立の相は如所有性である。それのみによつて、その事の究竟に達するが故に盡所有性と如所有性とはその事の邊際である。

更に、何時その事の邊際を轉するのであるか。阿頼耶識が轉依する時、その事の數と相との邊際を轉するのである。

かくの如く、所縁と所依との事の邊際、轉依の自性が事の邊際といはれ、これが斷圓滿である。<sup>⑤</sup>

と説かるゝことによつて、事邊際といはるゝことが明かであらう。

この阿頼耶識の流轉と還滅との自體が事邊際といはれ、それが本品に於て止觀の主體として擧示せられたことであるが、前第三節に於て依他の事の三相として施設

せられたものであつた。かくして本品も亦、前來の諸品と文義共に聯繫して有機的體系の下に構造の成立を得てゐるものなのである。

次に、此等の四種所縁は觀行者の修行する順序より説いてゐるものである。先づ、所縁を求め、ついで所縁を得、所縁を修習し、終りに果を得るのである。

初め觀行者は非等引地に住在しては有分別影像の所縁もなく觀の道も生じないのである。これが因緣熟して正法を聞き、誦持し、善知識の勸化に與つて等引地の作意を現前せしめ、而してその相を自己の覺慧の上に顯現せしめんがために最初に等引地の心によつて信解作意があるのである。かく所縁を求める時には止が先行するから止觀として止が前に置かれてゐるのである。

かくして信解作意の對象の教法としては種々あることであるが、<sup>⑥</sup>瑜伽行派としては三相の教法である。その三相の體は虛妄分別なる三界の心心所であつて、それは内(能取法)と外(所取法)との諸の事體であるが唯識としての行相あるものに過ぎないものである。この所知事と相似の相を自己の覺慧の上に顯現する時、有分別影像の



所縁を得、かくして、觀の道が現前するのである。

次に、その所縁を得てより止の相が一向に轉する時、無分別影像を得、而して唯識相の散動を止息する止の道が生ずるのである。

次に、相縛と共に麤重縛も止息し、所取法(外)と能取法(内)との二なき無二の義の自覺が生じて止觀變遷となり、事邊際と所作成辨との所縁を一時に得ることゝなるのである。それを得る時、斷圓滿によつて顯はるゝ果なる轉依の自性と、智圓滿によつて彰はるゝ果なる正智の自性を一時に得るのである。この二果を得る時、一切相を現等覺する佛の無上位に到達して如來と言はれるのである。

以上、四種所縁を經の説相と隨應せしめ、加行の實際について説述したものである。

かくの如く、四種所縁の教説が前品の其と相屬して説かれ、その意義が述べしが如くであるとするならば、ある學者が影像門の唯識として擧示する「識所縁唯識所現」といふ句は瑜伽行者による體驗的事實を述べてゐるものに過ぎないと言つて、それが前品よりの論理的展開であ

ることを認めないが如き口吻あるは妥當でないであらう。

次に、影像門の唯識について言ひ及んだのを便として、着疏が無分別智覺を失はざらしめんが爲に假説を決擇すと科してゐる一段の教説について關説しよう。

佛教の覺證は究竟して無分別智覺でなければならぬ。然るに瑜伽觀行の實際について考察するに、それと相應しないが如きものがあるやうである。即ち、三摩地所行に於ける影像と止觀の心とは異であるのであらうか或は一であるのであらうか。若し異であるとするならば、所取の法である影像と能取の法である止觀の心との二となるから、二と差別すること無き無分別智を如何にして證ることが出来るであらうか。若し一であるとするならば、心と影像といふやうに二と別異して施設することとは相應しないではないであらうかといふ疑である。

彌勒菩薩のこの疑問提示について如來は第一に、其等の二は異なることなしと答へ給ふのである。その影像はかの心こそ影像の如く所縁として顯現せるものであるから唯識(vijñapti-matra)にして心と異なること無しと説

示するのである。

第二に一では無く別異して説いてよいのである。それは「識の所縁は唯識として現はるゝ所なるが故に」と説くが如く、識こそは影像として所縁に似て顯現するのであるから、心と影像と差別して施設せられることも相應するのである。而してそれと同時に心の自性より別異すること無き影像を自覺の理趣よりして記識 (vijñapti 相識) は識 (vijñāna) の相 (lakṣaṇa, mātṛan-nid) であると説くのである。それ故に、所取の法である影像と能取の法である止觀の心とについて、一・異の分別を離れて無分別智覺を得ることが出来るのである。

これがその科段の意味する要領であるが、第三節方便利樂を説く條下に、依他起性は虚妄なる三界の心心所であるが、その行相としては了別 (vijñapti) より外はないから一切諸法が唯識 (vijñapti-mātra) として表現せられるとも述べたるが如く、「識の所縁は唯識所現である」といふことは、道理として然るべきことであつて分別瑜伽品が入理門を主とするよりして當然顯了にせられることでなければならぬ。

又、唯識思想については、本品の中に七眞如の一として了別眞如を説き、二無性の自性は不變眞如にして、諸行は唯識なりと註釋せられて居るが、七眞如の一として數へられるまでには、既に唯識思想が醗酵してゐたと豫想せられるのである。

終りに本品所説の樞要をなす四種所縁について「如世尊説四種所縁境界」と經に標擧することは本經説述の方規より見て諸品のその如く據處が見出さるべきであると考へられるが、今はそれを後日に譲らなくてはならない。

尙、本品に於ける所説に於て般若經と直接關係する條下は、微細現行によつて徧知を失はざらしめんが爲に假を決擇すと科せられ、不失の第十一段であるが、そこに、依他相に於ける難可除遣の十相を、一切法空、相空、無先後空、內空、無所得空、外空、内外空、本性空、大空、有爲空、畢竟空、無性空、無性自性空、勝義空、無爲空、無變異空、空空等の十七空によつて除遣すと説示し、或は、不失の第十四段であるが、そこに、依他相に於ける二十一細相の現行の棄捨すべきことを説いてゐるが、内

相等の十七相は内空等の十六空によつて證るべき相であると教示してゐる。此等の十七空或は十六空が般若波羅蜜經の教説であることは言ふまでもないことである。

註① 附錄科判、第八品

② 講讀、日藏・六・一七八頁

③ 智藏疏 P. Ts. Mdo-herel. XLVIII. 1716.

④ 解深密經分別瑜伽品

盡所有性者謂諸雜染清淨法中、所有一切品別邊際是名此中盡所有性如五數蘊、六數內處、六數外處、如是一切、如所有性者謂即一切染淨法中、所有眞如、是名此中如所有性此復七種（大正、一六、六九九下）

⑤ 解說、第一二五函、一七三表裏

⑥ 淨行所緣（多貪行者緣不淨境、多瞋行者緣慈境、多癡行者緣衆緣性諸緣起境、憍慢行者緣界差別境、尋思行者緣入出息念境）、善巧所緣（蘊善巧・界・處・緣起・處非處）、淨惑所緣（下地龜性上地靜性、眞如及四聖諦）等をいふ。大乘阿毘達磨集論、卷六（大正、三一、六八七上）參照

⑦ 結城令開著、唯識思想史二九五頁

⑧ 講讀、日藏・六・一八三頁

⑨ 解說、第一二五函、二一三裏

第六節 地波羅蜜多品の構想

佛教の覺證は聞・思・修等によつて成滿せられるものでなくてはならない。無分別智覺が身・口・意の三業の行爲（*carita*）に無功用に顯現すべきものである。かくしてそれが佛母といはるゝ波羅蜜多である。而してこの波羅蜜多の圓滿を如何に圓滿し、何を圓滿するかについて、覺圓滿なる十一地と行圓滿なる六波羅蜜多を説いてゐるのが本品なのである。

この中、覺圓滿なる地の差別については、科に示すが如く七段に、行圓滿なる波羅蜜多の差別については二十段に分別、施設せられてゐる。

先づ注意すべきは勝義諦相品が般若經の句釋であつたのに對して、本品第一部の發端に「如佛所說菩薩十地所謂極喜地乃至法雲地、復說佛地爲第十一地」と標舉する所より大華嚴の根本支柱の一を爲す十地經を據處とし、その種々なる問題より論攻を爲すものであるといふことである。

第一果善巧を明すとは、一切衆生は極喜地に住してよりは出世間の住を現觀（*abhisamaya*）する義より果といはるゝのであるが、その果が増上意樂清淨、増上戒清淨、

増上心清淨、増上慧清淨等の四種清淨によつて差別せられることを知るのが果善巧といはれるのである。

第二所治、能治の善巧を明すとは、歡喜地より佛地に至る十一地の各々に於て、その所對治分と能對治分とを差別して知ることである。解説によれば、其等十一地は、一所對治分の捨斷、二能對治の修習、三修習の果を得ること、四その圓滿善巧等の四相によつて説述されてゐることを指示してゐる。此等四相の説示次第は又十地經各地の説示次第と相應するものである。それであるから本項は十地經の收約的教示であつて、十地經の假設を待つて、その經意が全領せられるものである。

第三名善巧を明すとは、其等十一地各地の名についてその意義を明にするより善巧といはれるのである。十地經に於ては、第一地歡喜・第八地不動・第十地法雲の三地には釋名分なる一科があるのであるが、餘他の諸地にはないから、それを補足する意味より説かれたものであらうか。

今、第一極喜地の經文は次の如く教示する。

善男子〔一〕成就就大義、得未曾得出世間心、〔二〕生三大

歡喜地、是故最初極喜地。<sup>②</sup>

解説によれば、この極喜地の釋名は因・果の二門より立名せられ、第一句は因より、第二句は果より解釋するものである。

その中、因門よりとは、菩薩の本願は六種の善決定と相應し、初地に入る勝義の發心であるから出世間心といはれ、自他の利益といふ大義を成就する因より歡喜〔*pramodya*〕が生ずるからである。

又、果の門よりとは、その地に住すれば出世間心を得たることを知つて多くの大歡喜〔*pramodya vistirya*〕を得るのである、この因果二門よりして正しく歡喜地〔*pramuditā-bhūmi*〕といはれるのである。

此等の因果二門による解釋は十地經初地分中の第五本分、並に第七説分中の釋名分等によつて總合して説示したものであることを知るのである。

第八不動地・第十法雲地の釋名も亦、十地經の各地の釋名分より攝義して説かれてゐること極喜地のそれと同様である。後來の諸論經の十地の釋名は本經を根本源流とするものゝ如くである。<sup>④</sup>

第四所對治分差別善巧を明すとは、十一地の中にある慧解脫と心解脫とに對する所對治分を顯示することである。

第一地には執著補特伽羅及法愚癡 (pudgaladharmā-abhiniveśasamimoha) と惡趣雜染愚癡 (apāyika samkleśasamimoha) との二無明がある時には見道の慧解脫が生じないからこれが初地慧解脫の所對治分である。此等二種の習氣 (vāsana) が麤重 (dauḥhulya) といはれ、これがある時に見道の心解脫が生じない。これが初地の心解脫の所對治分である。

以下各地の慧解脫の所對治分を列擧する事としよう。

## 第二地

微細誤犯愚癡 (sūkṣmāpattiskhalita-samimoha)  
種々業趣愚癡 (nānāvidhakarmavipākā-s.)

## 第三地

欲貪愚癡 (kāmarāga-s.)  
圓滿聞持陀羅尼愚癡 (cṛutadhāraṇiparipūrī-s.)

## 第四地

等至愛愚癡 (samāpatisneha-s.)

法愛愚癡 (dharmaśneha-s.)

## 第五地

一向作意棄背生死愚癡 (saṁsāra-ekāntavainmukhya-abhimukhya-manasikāra-s.)  
一向作意趣向涅槃愚癡 (nirvāṇa-ekāntavainmukhya-abhimukhya-manasikāra-s.)

## 第六地

現前觀察諸行流轉愚癡 (saṁskāra-pravṛttsāksātkāra-s.)

相多現行愚癡 (nimittabahusamudaya-s.)

## 第七地

微細相現行愚癡 (sūkṣmananivṛtta-samudaya-s.)  
一向無相作意方便愚癡 (anivṛtta-ekāntamanasikāra-upāya-s.)

## 第八地

無相作功用愚癡 (nirvṛtta-ābhoga-s.)  
相自在在愚癡 (lakṣaṇavibhūta-s.)

## 第九地

於無量說法無量法句文字後後慧辯陀羅尼愚癡 (apara-

mayadegañādharmeṣu aprameyadharmapadavyañjan-  
neṣu uttarotaraprajñāpratiḥāne dhāraṇīvaṇṇa-s.)

辯才自在愚癡 (pratibhānavāṇṇa-s.)

#### 第十地

大神通愚癡 (mahabhīṇā-s.)

悟入微細秘密愚癡 (sūksmaguhyapaskandana-s.)

#### 第十一地

於ニ一切所境界ニ極微細著愚癡 (sarvajñeyārtheṣu śi-  
kṣmatama-śaṅga-s.)

極微細癡愚癡 (sūksmatanapratigṇa-s.)

以上、二十二種の愚癡、及びそれに隨伴する十一種の  
癡重とを對治することによつて心・慧解脱し、所依を轉  
じて現等覺するのである。此等の所對治分の名義につい  
ては十地經各地の教說に依つて標示したものに相違ない  
であらう。

菩薩は實に此等の愚癡と習氣との除遣のためにこそ無  
數劫の菩薩修行が要請せられ、且つ又其等の除遣の分位  
に應じて佛地への位次進展の權證を得たものであらう。  
實にかゝる愚癡と習氣との轉滅施設にこそ瑜伽行派の眞

面目の一面があると思惟して殊更に二十二無明の名目を  
列舉したものである。

次に、第五能對治差別善巧を示すことは入地の清淨な  
る八善の差別を善く知ることを説くこと、第六自と他と  
の身體・異熟の所依善巧を明すとは、菩薩の生は一切世  
間に於て殊勝であり、壽命・色身・種性・自在等の異熟  
身を成就し、その異熟身によつて自他の衆生を成熟する  
について善く知ることを説くこと。第七意樂圓滿方便善  
巧を明すとは、菩薩は正願成就のために佛法を圓滿し、  
衆生成熟を善く知ることを説くものである。

第二部は、行圓滿波羅蜜であるが、六種波羅蜜多につ  
いて二十種に互つて問答分別してゐる。

#### 註① 科判、細科第八品參照

② 解深密經卷四 (大正・一六・七〇四上)

③ 六種の善決定、一觀相善決定、二眞實善決定、三勝善決  
定、四因善決定、五大善決定、六不怯弱善決定、國譯十  
地經論、論部五〇・二〇頁參照、解說第百廿五函、三一  
三表

④ 攝大乘論卷下 (大正・三一・一四五下) 十地經論卷一 (國  
譯・論部・五〇・二三頁)

第七節 如來成所作事品の構想

本品は解深密經の最後品であるが、前品等の菩提の因を説くに對して果である佛果を明すもので、科によつて示すが如く、<sup>①</sup>如來の因圓滿と果圓滿と作事圓滿とを顯示するものである。

着疏によれば、如來身に於ける諸癡妄の對治を説示するものにして、如來の因と果との圓滿によつては法身の相を明して如來身は無常なりとの分別を對治するものであり、如來の作事圓滿によつては、如來身の生起相を示して如來身の謬相分別を對治するものと釋してゐる。

扱て、如來の法身・生起の二相を説くに當つて先づ「如佛所説如來法身」とて聖教 (āgama) を擧ぐるのであるが、解説には、「導師は法身なり。」といふ般若三百頌 (Triṣatikā-prajñāpāramitā) 即ち金剛般若經の經句を擧示し、以て其等處々の經中に説くと言つてゐる。部派佛教に於て、大衆部系が佛の色身の無邊を、上座部系が色身の有邊を以て佛身を主張するのであるが、佛身は無邊に非ず有邊に非ずと其等を批判して佛法の眞實義を法性を以て觀るべきを教示して法身如來としてゐるのは般若經

である。小品般若、第二十八疊無竭品には、

諸佛如來、不應<sub>レ</sub>以<sub>二</sub>色身<sub>一</sub>見<sub>レ</sub>、諸佛如來皆是法身故、善男子、諸法實相無來無去、諸佛如來亦復如<sub>レ</sub>是<sup>③</sup>とあつて、この解深密經に法身如來と説くものが、般若經であることを指示することは道理あると思はる。

この如來法身相について如來の因果圓滿を經典には次の如く説示してゐる。

善男子、若於<sub>二</sub>諸地波羅蜜多<sub>一</sub>善修<sub>二</sub>出離<sub>一</sub>、轉依成滿是名<sub>二</sub>如來法身之相<sub>一</sub>、當<sub>レ</sub>知此相二因緣故不可思議、無戲論故、無所爲故、而諸衆生計<sub>二</sub>著戲論<sub>一</sub>有<sub>二</sub>所爲<sub>一</sub>故 (大正・一六・七〇八中)

この所説の中、諸の地と波羅蜜多とに於て善く出離を修しとは如來の因圓滿を、轉依成滿とは如來の果圓滿を示すのである。

この説述に於て、如來の因は覺圓滿なる地と行圓滿なる波羅蜜多により善く出離を修するより外ないのであつて前品の所説を收約するものである。如來の果は轉依成滿 (āraya-parivṛtṣaṃśānta) と説かれるが、その轉依の依とは所依 (āraya) であつて、果にありては法

界であるが因にありては阿頼耶識である。その阿頼耶識は勝義諦不可言無二品に於て隱説し、世俗諦心意識相品にその事體を顯説し、一切法相品並に無自性品にはその事相を有性と無性とより廣説し、後の二品にその還滅の觀法と善修とが説かれてゐる。その成滿とは正智と如如とを自體とせる如來であつて正しく本品の所明とする所である。實にこの一句にこそ諸品の多句を相ひ容れてゐると言ひ得るものである。

この轉依成滿の法身の相は二因縁より不可思議であると説く。この不可思議とは般若經に於ては般若波羅蜜多であり、その標句が勝義諦相品の廣説なのであるから、この一句こそ勝義諦相品の所説を攝盡する一法句であるといふべきである。

然らば何故に不可思議であるか。無戲論の故に、無所爲の故にと説示するのである。

その中、無戲論 (nirapravāṇa) とは解説に隨へば、<sup>④</sup>「不生亦不滅、不常亦不斷、不一亦不異、不來亦不去」であるからであるとなし、無所爲 (anābhisaṃkāra) とは其等の生滅等の邪執を止息する理趣よりいはるゝと釋し

てゐる。かくの如く解深密經の如來法身の相は般若經によつて標舉し、龍樹中觀の思想によつて説示してゐるものであると考へられるのであるが、轉依を以て法身開示の根據とする所に本經不共の教示を見るべきであらう。

次に、如來作事圓滿に於ては轉依成滿せる不可思議なる法身如來が衆生の利益作用の圓滿する相を説示するものである。それについて生起相等の十相によつて廣説してゐる。而して此等の十相は大華嚴の如來性起品と相應する如來生起稱經 (Tathāgata-upapattibhavanideśasūtra. M. V. no. 1378) に據ると指示する。<sup>⑤</sup>この如來性起品は華嚴經の成立構造より言つて根本主柱と見らるべき重要な經典なのである。

この經典の序品中の本分に於て、普賢菩薩に對して如來性起妙徳<sup>⑦</sup> (Tathāgatagotrāsambhavarī) 菩薩が次の如く法を請ふのである。

善哉佛子、願説如來應正等覺、<sup>①</sup>「一」出現之法、<sup>②</sup>「二」身相、<sup>③</sup>「三」言音、<sup>④</sup>「四」心意、<sup>⑤</sup>「五」境界、<sup>⑥</sup>「六」所行之行、<sup>⑦</sup>「七」成道、<sup>⑧</sup>「八」轉法、<sup>⑨</sup>「九」乃至示現入般涅槃、<sup>⑩</sup>「一〇」見聞親近所生善根、如是等事願皆爲説



この請に應じて普賢菩薩は如來性起の正法を順序の如く説くのが正宗分を爲すものである。

解深密經の如來作事圓滿の文科の十相が此の性起菩薩の請分と應ずるのを見るが如く、解深密經如來作事圓滿の教説は如來性起品に依つて施設されてゐるのである。例へば攝大乘論が大乘阿毘達磨經の十勝相に依り、究竟一乘實性論が陀羅尼自在王經の七句に基いて構成されて居るものと同じ規格を保有するものである。

かくの如く、大體の組織が如來性起品に據るのみならず、各相の文相も亦性起品の各相の文相を攝約・隨應して成立してゐる。

第一生起相の教説について、その事情の一般を論證しよう。解深密經は次の如く説いてゐる。

曼殊室利菩薩復白佛言、世尊、我當云何應知如來生起之相、

佛告曼殊室利菩薩曰、善男子、一切如來化身作業、如世界起、一切種類、如來功德衆所莊嚴住持爲相、當知化身相有生起法身之相無有生起。(大正・一六・七〇八中下)

華嚴經如來生起品の第一生起相は法説と喩説十種及びその結文とより成つてゐるのであるがその法説は次の如くである。

爾時普賢菩薩摩訶薩告如來性起妙德等諸菩薩大衆言、佛子、此處不可思議、所謂如來應正等覺、以無量法而得出現、何以故、非以一緣、非以一事、如來出現而得成就、以十無量百千阿僧祇事而得成就、何等爲十、所謂(一)過去無量攝受一切衆生菩提心所成、乃至(一〇)過去無量通達法義所成故、如是無量阿僧祇法門圓滿成於如來<sup>⑩</sup>。

これは如來出現の法の不可思議にして無量の因緣法を以て出現することを説いてゐるものであるが、解深密經ではその出現の法を生起相の意味に取り用ひて化身作業と總示するものである。

華嚴經如來出現品に於ける佛陀は三世間に遍在する毘盧舍那佛<sup>⑪</sup>であり、示現の身相としては衆生の樂欲によりて左の十身とする。

八十華嚴 藏 譯 六十華嚴 興顯經  
(大・二・二七〇上) (大・九・六二〇下) (大・二〇・六〇三下)  
一、生身 skye-ba-hbyun- 清淨身 法身  
bañsku

二、化身	sprul-paṇi	生身	正覺身
三、力持身	byin-gyi-rlabs kyi	神力住持身	變化身
四、色身	gzugs-kyi	色身	建立身
五、相好身	sku sns-ishogs mñon-par bsgnubs-paṇi	種々身	色像身
六、福德身	bsod-nams kyi	功德身	功德身
七、智慧身	ye-ces kyi	智慧身	慧身
八、不可壞身	stobs la thub-pa med-paṇi	不可壞身	隨俗(十種力)
九、無畏身	mi-gñis-pa zhi-kyis-mi-non-paṇi	無畏身	四無所畏
一〇、法界身	chos kyi dbyinis-lus-med-paṇi	法界身	法界而無身形

右此等の十身具足の性起法 (gotrasambhava dharmā) の佛陀を説くのが華嚴經如來性起品本來の教説なのであるが、解深密經は此等を攝歸して化身作業を標示するのである。

次にその化身作業を喩説して「如<sub>二</sub>世界起<sub>一</sub>」と説く經句は如來出現品の生起相の法説に對して譬説十相を説くのであるが、その第一相に依つてゐるものである。即ち佛子、譬如三千大千世界、非<sub>レ</sub>以<sub>二</sub>一緣非<sub>レ</sub>以<sub>二</sub>一事而得<sub>レ</sub>成就、以<sub>二</sub>無量緣無量事<sub>一</sub>方乃得<sub>レ</sub>成、所謂興<sub>二</sub>布大雲<sub>一</sub>降<sub>二</sub>霖大雨<sub>一</sub>四種風輪、相續爲<sub>レ</sub>依……如是衆生皆由<sub>二</sub>

衆生共業及諸菩薩善根所起、令<sub>レ</sub>於其中一切衆生各隨<sub>レ</sub>宜而得<sub>レ</sub>受用、佛子、如是等無量因緣乃成<sub>二</sub>三千大千世界<sub>一</sub>、法性如<sub>レ</sub>是無<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>生者<sub>一</sub>、無<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>作者<sub>一</sub>、無<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>知者<sub>一</sub>、無<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>成者<sub>一</sub>、然彼世界而得<sub>二</sub>成就<sub>一</sub>如來出現、亦復如是。とある經文によつて解深密經の喩説が成立してゐることは明かであらう。

かゝる化身如來は如何なる自在 (vibhūti, bbyor-la) と相應するのであらうか。それ故に、「一切種類乃至住持爲<sub>レ</sub>相」と説くのであるが、その經文は生起相の教説の結文に據るのである。

即ち、

菩薩摩訶薩應如是知、佛子〔一〕菩薩摩訶薩知<sub>二</sub>如來出現<sub>一</sub>、則知<sub>二</sub>無量<sub>一</sub>、知<sub>レ</sub>成就無量行<sub>二</sub>故<sub>一</sub>、〔二〕則知<sub>二</sub>廣大<sub>一</sub>、知<sub>二</sub>周遍十方<sub>一</sub>故、乃至〔三〕則知<sub>二</sub>一切衆生皆得<sub>二</sub>饒益<sub>一</sub>、本願廻向自在滿故。<sup>⑩</sup>

と十一句文によつて説いてゐるが、特に最後の經文に基くやうである。如來の生起相である化身は本願廻向といふ自在を満足するから一切衆生を饒益すといふ衆生住持が示現の相となるからである。

以上によつて知るが如く、如來生起相を説く解深密經の經句は如來出現品(經)の生起相の法・喩・結の敎説を次第の如く要約して成立してゐるものである。

第二に化身如來の身體示現の相を説くのであるが、解深密經の經文は次の如くである。

曼殊室利菩薩復白、佛言、世尊、云何應知示現化身方便善巧。

佛告曼殊室利菩薩曰、善男子、徧於一切三千大千佛國土中、或衆推許增上王家、或衆推許大福田家、同時人胎誕生、長大受欲、出家示行苦行、捨苦行已成等正覺、次第示現、是名如來示現化身方便善巧。(大正・一六・七〇八下)

この經文の據處として如來出現品、第二身業を説く法説が指示せられる。これについて解説に引用する藏譯經文は唯識思想と關聯すると考へるから、それを和譯提示しよう。

如來性起妙德菩薩摩訶薩は普賢菩薩にかくの如く語り給へり。嗚呼、佛子等菩薩摩訶薩は諸如來應供正等覺の身示現 (sku ston-pa) を如何が知るべきやと。

普賢菩薩摩訶薩は如來性起妙德菩薩にかくの如く語り給へり。

嗚呼、佛子等菩薩摩訶薩は諸如來應供正等覺者の身示現は無量の隨入 (rjes-pa son-pa) と知るべきなり。それは何故なりや。佛子等よ、諸如來の身示現は一法若くは一身・一慈 (byams-pa) ・一刹 (shin) 一心・一事 (byed-rgyu, karaṇa) より知るべきにあらざと雖も一切の隨入と知るべきが故なり。

嗚呼、佛子等よ、譬へば虚空界は一切の隨入なり。有色と無色との一切の事物 (chos-po) の隨入にして何處に去ることも無く、何處より來ることも亦無きなり。それは何故なりや。虚空は無身 (lus-med-pa) の故なり。

佛子等よ、その如く諸如來の身も亦遍至 (thams-cad du soṅ-pa) なり。一切衆生と一切法と一切刹土との隨入にして何處に去ることもなく何處より來ることも亦無きなり。それは何故なりや。諸如來の身は無身の故なり。しかも亦衆生の了別 (rnam-paṅ-rig-pa, vijñap "u. 識) に依止して諸如來の色身を顯現するなり。佛

子等よ、菩薩摩訶薩は第一入門によつて諸如來應供正等覺者の身示現を知るべきなり等と十種の入門を知るべきなり。<sup>⑬</sup>

この經文に於て如來身の遍至が解深密經の「徧く一切の三千大千の佛國土の中に云々」と説くと相應するものであつて、これに據りて成立すとせらるゝのである。

第三に如來の言音相を説くのであるが、解深密經に於ては次の如く説示する。

曼殊室利菩薩復白佛言、世尊凡有幾種一切如來身所住持言音差別由此言音所化有情未成熟者令其成熟已成熟者緣此爲境速得解脱。

佛告曼殊室利菩薩曰、善男子、如來言音略有三種。

一者契經二者調伏三者本母(大正・一六・七〇八下)

この經文の所依として解説は如來出現品第三語業を説く法説に基くと指示してゐる。この解説引用の經文は又身業引用のそれと同じ意義の存するものがあるから次に和譯し引用することゝしよう。

如來性起菩薩摩訶薩は普賢菩薩摩訶薩にかくの如く語り給へり。嗚呼、佛子等菩薩摩訶薩は如來應供正等覺

者の言音 (gsun-brjod-pa) を如何が知るべきやと。

普賢菩薩摩訶薩は如來性起妙德菩薩にかくの如く語り給へり。

嗚呼、佛子等菩薩摩訶薩は如來應供正等覺者の言音は〔一〕音の境界 (dbyaṅs kyi dkyil-'ikhor) は無量によつて普通の故に遍至 (thams cad kyi rjes-su-soṭ-ba) と知るべきなり。〔二〕説法によつて歡喜せしむるが故に一切衆生を意樂の如く歡喜せしむと知るべきなり。〔三〕心を歡喜せしむることによつて、一切の衆會を信解の如く歡喜せしむと知るべきなり。〔四〕時を失はざるが故に時に應じて歡喜せしむと知るべきなり。〔五〕響の如きが故に常に生無く滅無しと知るべきなり。〔六〕衆生の業を積聚すと説くが故に主無しと知るべきなり。〔七〕深難思の故に甚深と相應すと知るべきなり。〔八〕法界を分別するが故に邪曲無しと知るべきなり。〔九〕法界に普く入るが故に斷絶無しと知るべきなり。〔一〇〕究竟に至るが故に變易無しと知るべきなり。

諸如來の言音は主 (bdag-po) 有るにも非ず、主無きにも非ず。表示 (nam-par-rig-pa, vjñapti) 有るにも

非ず、表示無きにも非ずと知るべきなり。

それは何故なりや。佛子等よ、譬へば世界の壞せんとする時、法爾として四大音聲を出す。其等は主無く、主の無を執することなし。四とは何ぞや、佛子等よ、世界の壞せんとする時法爾として、あゝ友等よ、初禪は安樂にして欲と害心とを離れ、欲界を超過せり！との第一音聲出づるなり。諸の衆生はその聲を聞いて初禪を成就し、欲界より超過して梵天に生れり。その時、又法爾として、あゝ友等よ、第二禪……第三禪……その時又法爾として、あゝ友等よ、第四禪は「寂靜にして」遍淨天を超過せり！と第四大音聲出づ。諸衆生はその聲を聞いて第四禪を成就し、遍淨天を超過して廣果天と同類として生れるなり。あゝ、佛子等よ、かくの如く世界の壞せんとする時、法爾として四大音聲出づるも其等は主なく我所無く能執も無く、衆生の無量の功德と相應するものなり。

あゝ、佛子等よ、かく諸如來に於ても法爾として如來言音の四大音聲出づ。其等は又主無く説くべき所作無く、無戲論・無取にして轉ず。四とは何ぞや。

即ち、法爾として「一」あゝ友等よ、此等一切の諸行は苦なり。地獄と餓鬼處との衆生は苦なり。夜摩界は苦なり。福德無きは苦なり。我所執は苦なり。惡業を行するは苦なり。天と人とに生れん爲に善根を生ぜよ。賢聖の句 (bhāṣas-pāṭiṇas) を受けよ。八難處に生るゝことを捨離せよとかくの如き第一大音聲出づ。諸衆生はその聲を聞いてその如く修行し、修行し已つて善根を行じ、善根行に入る時八難處に生るゝことを捨離して天と人との圓滿を攝取するなり。

その時又法爾として、「二」……「三」……その時、又、如來より法爾として、あゝ友等よ、大乘は聲聞と獨覺との乘より超過す。菩薩の行と相應し、菩薩の六波羅蜜を斷ぜず、無量の生死を攝取し、無量の福德と智慧との資糧を成就せり。聲聞乘は他人の語に隨ひ、獨覺は小なり。大乘は第一乘、勝乘、最勝乘、無上乘、一切衆生を利益する乘なりとかくの如き第四大音聲出づるなり。

衆生は廣大を信解し、諸根は猛利にして宿世に善根を種え如來の威神に加せられること等によつて、その

聲を聞き、増上意樂によつて如來性と自然性 (ra-bryan-ñid) との爲に無上正等菩提を發心するなり。

かの如來の言音は身より生ぜず、意より生ぜざるも諸衆生の善業を積集することによつて了別 (nam-par-rig-pa, vijñapti 識) に於ても亦「利益」所作するが故なり。

あゝ佛子等よ、菩薩摩訶薩はこの第一入門によつて如來の言音を知るべきなり等と十種入門を説くが如く見るべきなり。<sup>(14)</sup>

解深密經の如來の言音は空しく發らず衆生を成熟利益する説相はこの經文等によりて取得・施設したものであることは明かである。この言音について如來生起品の無量分としての説示を解深密經では世間流布の契經音と調伏音と本母音との三分に差別して説示してゐる。

因に前引の二和譯經文の中、次の三文が唯識思想と關係するやうであるから、異譯のそれをも列舉し以て關説することゝしよう。

一、一、しかも亦衆生の了別 (nam-par-rig-pa, vijñapti 識) に依止して諸如來の色身を顯現するなり。

二、しかも亦衆生の了得あるが故に (nam-par-dmigs-pa yod-pai phyin) 身示現も亦有るなり。藏譯如來出現品 (北京版・五九・九) 表

三、爲衆生二故示現其身、八十華嚴 (大正・一〇・二六六上)

四、諸如來身非是身二故、隨所應化二示現其身、六十華嚴 (大正・九・六六一上)

五、如來身者欲以開化衆生之故因現身耳、興顯經 (大正・一〇・五九八中)

一、一、諸如來の言音は主 (bdag-po) 有るにも非ず、主無きにも非ず。表示 (nam-par-rig-pa, vijñapti) 有るにも非ず、表示無きにも非ずと知るべきなり。

二、諸如來の言音は主有るにも非ず、主無きにも非ず。了得 (nam-par-dmigs-pa) 有るにも非ず、了得無きにも非ずと知るべきなり。藏譯如來出現品 (北京版・五九・一〇〇表)

三、如來音聲非量非無量非主非無主非示非無示、八十華嚴 (大正・一〇・二六八中)

四、知如來音聲非量非無量非主非無主、非智非無智、

六十華嚴 (大正・九・六一八下)

五、亦無有主亦無不主、亦無教化亦無不教、斯則爲隨如來音響、興顯經 (大正・一〇・六〇一上)

三、一、かの如來の言音は身より生ぜず意より生ぜざるも諸衆生の善業を積集することによつて了別 (nam-pariṣ-pa, viñapū 識) に於ても亦〔利益〕所作するが故なり。

二、かの如來の言音は身より生ぜず意より生ぜざるも諸衆生の善業を積集することによつて悟了なきこと (khoṇ-du-chud-par-ḥgyu-ba med-pa) も亦無きなり。

藏譯如來出現品 (北京版・五九・一〇二表)

三、如來音聲不從身出、不從心出、而能利益無量衆生、八十華嚴 (大正・一〇・二六八下)

四、諸佛如來微妙音聲不從身出、不從心出、而能饒益無量衆生、六十華嚴 (大正・九・六一九上中)

五、諸如來者無身無心亦無所演無所開化、而令如得蒙安、興顯經 (大正・一〇・六〇一上)

此等の三文の中、第一文は如來の色身の示現について言はれるが、漢譯三經に於ては如來が衆生の爲に身を示

現するとのみ語り示現の方法について言及されないが、藏譯に於ては衆生の了別 (nam-pariṣ-pa)・了得 (nam-par-dmigs-pa) に依止して身を顯現すと語り、系統を異にするが如くである。

第二文は如來の語業である言音の表示——示・智・教・了得——の有に非ず無に非ざることを説くのである。その言音の體は名・句・文であつて表示であるが、それを識相等と考ふべきかは華嚴經奉持派の根本思想に據るであらう。

第三文はその言音について、漢譯諸經は衆生利益することを述べるのみであるが、藏傳諸經は第一文の如く衆生の了別に於て利益あることを説示してゐる。

此等の所説は教體 (āsanaṭupa) を如來の了別と爲すか、衆生の了別と爲すかの論議に關係すると思はれる。

佛地經論卷一には、

一、有義如來慈悲本願増上緣力、聞者識上文義相生、此文義相雖親依自善根力起而就強緣、名爲佛說、由耳根力、自心變現故名我聞。

二、有義聞者善根本願増上緣力如來識上文義相生、此

文義相是佛利他善根所起名爲「佛說」聞者識心雖「不」取  
得「然似」彼相分「明顯現故名」我聞<sup>⑮</sup>

とあつて、測疏卷一には、第一義は龍軍（無性等）の佛果に色聲等あることを許さざるものであり、第二義は護法等の佛果の中に色聲等を具すと許すものであると傳へてゐる。

此等の諸説は後代のものであるとしても、その思想の淵源する所は遠く部派に於ける佛身説法の考察より展開せるものがあるであらうし、其等の思想を繼承して成立せる大乘經典に於ても亦系統の異なるものがあるであらう。更に又、一佛地經の系統にも異流がある如く、大華嚴經のそれにも亦異流があるであらうことは想像し得るであらう。今は其等の教體論の究明にあるのではなく、前引の藏譯華嚴經と漢譯のそれとは文相の上より相違が見られること、更に其等藏譯に於て唯識説の醞釀せる素地のあることを注意するにあるのである。

次に第四心生起相より第十見聞相に至る七相も亦前三相の如く如來出現品を據處としてゐることを指示することが出来るのであるが、本品の成立構造を知る論證とし

ては前述によつて充分であらう。

以上によつて解深密經の最後品である如來成所作事は序品の如く般若經と華嚴經とを以て成立の素材とし、其等兩大乘經典に説かれる佛身思想を瑜伽唯識學派の覺證體系を以て構造してゐるといふことが出来るであらう。

終りに本經の佛身觀について略説せんに、菩提の果を明す成所作事品は如來の因果圓滿と作事圓滿との二大段に分れるのであるが、第一段は般若經の佛身觀より法身思想を、第二段は華嚴經の佛身觀より十身を統一せる化身思想を得、此等の法化二身を具足せる一如來を説いてゐるのである。その法身は雜染の所依なる阿賴耶識が無漏法界なる所依を轉じて斷果と同時に智果を得たる能化の自體なるものである。能化の自體は化用を待たなくてはならない。その能化と化用との關係を「又彼化身是〔法身〕如來力所住持二故」<sup>⑯</sup>と説いてゐる。佛果への向上と衆生への向下との二門に互つて所依 (āśraya) を核體としてその兩面に理論的根據を施設した所に本經の佛身思想が法化の二身説とはいへ佛身思想史上意義ありといふべきである。



從來、解深密經の佛身思想を三身と判じ、序品の佛身、佛土を以て受用身、受用土であると隨唱して來たが、それは後來の思想を以て分判してゐるものである。

その三身の語は佛地經に於て創唱せられ大乘莊嚴經論の菩提品に引用、解釋せられ、佛三身思想として成立したものである。

藏傳解深密經解說に如來生起の相を釋するに當つて、「諸如來生起の相は諸如來の化身によつて生起の相と相應するものである。生起相は受用身によつても相應するけれども化身は一切世界に生れる〔増上王・或は大福田等の〕家がある。受用身はかくの如きこと無きがために化身によつて説くものである。」<sup>⑨</sup>といつてゐるが、これは解説が三身思想を以て理解するよりする説明にすぎない。然し解深密經に於て受用身が説かれる契機の説相が無いといふ意味ではなく、分別瑜伽品の終り無餘涅槃界の二種受永滅を説く所より展開すべきものゝ如くである。

解深密經序品の佛德について、着疏によれば二釋あり、二利圓滿の釋に於て、第十三德を變化身の德を示

し、第十七德を法身の德を表はすものとせられ二身の取り扱ひとなつてゐる。事攝圓滿の釋に於て、佛地經論等が如來の受用身に住する功德を遊戲神通圓滿とし、或は三種佛身方處分限無き功德を功德無盡圓滿と命名するが如く、總じて、着疏には受用身の語も、三種佛身の語もないのである。これは着疏が經典の當相と正しく相應してゐるものであることを語るものであらう。

本經の佛身思想は法化の二身門である。これより解深密經十八圓淨の淨土は化身の土と決擇すべきであると思惟する。

#### 註① 科判細科第十品參照

② 般若三百頌、第八部の金剛般若(測疏・續藏・三四・四・一二上)にして、大般若經第九會によつて示せば、

諸以色觀我 以音聲尋我

彼生履邪斷 不能當見我

應觀佛法性 即導師法身

法性非所識 故彼不能了

と。(大正・七・九八五上)

金剛般若波羅蜜經(大正・八・七五六中)、蒙藏梵漢和合璧金剛般若波羅蜜經、橋本・清水譯編、*dharmakaya hi nāyān* (p. 153)

- ③ 小品般若經(大正・八・五八四中)、佛母出生經(大正・八・六七四上)
- 但し道行(大正・八・四七三下)、大明度(大正・八・五〇五中)等の古譯には言葉として見出すことは出来ない。而して佛身思想の上より此等新古二譯には徑程がある。
- ④ 解説、第一二六函三一表
- ⑤ 解説、第一二六函三三表裏
- 如來生起經 (*qphags pa de-bstun-egs-pa skye-ba-kyun ba bstan-pa'i mdo*) の漢譯は左の如し。
- 如來興顯經四卷竺法護譯(大正・一〇・五九二下―六一七下)
- 八十華嚴第三七如來出現品(大正・一〇・二六二上―二七八下)
- 六十華嚴第三一寶王如來性起品(大正・九・六二中―六三一中)
- ⑥ 高峯了州、如來出現の思想と華嚴經結構の意圖、龍谷學報、第三三一號、三二頁
- ⑦ 如來性起妙德菩薩、華嚴經の根本思想は性起説といはるゝが、それは *gotrasambhava* なるこの菩薩名より梵名を得らるべきものである。その性とは *gotra* (種性) であり、それより華嚴の如來種性の意義が考察せねばならないものである。高峯了州氏は龍谷學報第三三一號四三頁にその性起の語義を論じてゐるが、それは再考を要するであらう。それについて詳論することは他日に譲るで

あらう。

- ⑧ 八十華嚴、第三七如來出現品(大正・一〇・二六二下) 善哉佛子、願説如來性起正法。六十華嚴(大正・九・六一二上)
- ⑨ 八十華嚴如來出現品(大正・一〇・二六三上)
- ⑩ 八十華嚴如來出現品(大正・一〇・二七八中)、六十華嚴如來性起品(大正・九・六三〇下)
- ⑪ 八十華嚴如來出現品(大正・一〇・二六三中)
- ⑫ 右同(大正・一〇・二六五上)
- ⑬ 解説第一二六函三七裏―三八表
- ⑭ 右同三九裏―四二表
- ⑮ 佛地經論卷一(大正・二六・二九二下)
- ⑯ 測疏卷一(續藏・三四・四・三〇二右上、二九三左參照)
- ⑰ 異部宗輪論述記發軔・中・二一右、佛一切時不説名等常在定故、然諸有情謂説名等歡喜踊躍
- ⑱ 解深密經、卷五(大正・一六・七一上)
- ⑲ 解説、第一二六函三三裏

## 結 論

以上、解深密經の成立について基礎となれる諸經典を研尋し以て本經の構造を究明して來たのであるが、左の如く言ひ得るやうである。

解深密經八品の中、第一序品は華嚴經離世間品に、第七地波羅蜜多品は十地經、第八如來成所作事品は如來性起經に據ること文面顯了に指摘せられ、第三心意識相品は恐く四十華嚴經に基くと推定せられ、更に、第四一切法相品、第五無自性相品及び第六分別瑜伽品も亦、華嚴經の所說に順據すと豫想せられる。

次に、第二勝義諦相品は般若經の不思議品の廣說であること先づ以て事實であり、その外、第一序品、第四一切法相品、第五無自性相品及び第八如來成所作事品も亦、般若經に所說の根基を置くことが認容せられるやうである。

かくの如く解深密經は前代に興隆せる般若經並びに華嚴經を聞相とし、瑜伽行人によつて覺證せる體驗を説示せるものである。然も諸品は相ひ鉤鎖し義理は連環して組織ある體系によつて成立してゐるものである。實に、般若經及び華嚴經を共に不了義として決擇せる了義の深密法門なのである。

茲に、左の如く結論し得るであらう。

一、印度に於ける瑜伽唯識學派は支那に於て地論・攝

論・法相の三宗として流傳した。其等の三傳は解深密經の成立構造に見るが如き從容たる性格が瑜伽行派本來の思潮であつたので、それが時代文化の影響によつて自然に展開したのであらう。

二、現在の學界に於て本經を目して「寄木細工的」といはるゝのは、その經典解釋の傳承を失つた所に起因するのであるから、本經は新に藏傳資料によつて再檢討せねばならないのである。

三、古來、法相宗の三時教判は深密會上の佛說として尊重し、その第二時法輪は諸部般若の無相法輪であると隨唱して來たが、本經の成立構造の研究より言つて諸部般若と共に華嚴經が攝せらるべきである。

四、本經の佛身思想は法・化の二身門であつて古來、受用身の所說とするのであるが化身所說となすべきものである。

因に、淨土論の三嚴二十九種の莊嚴淨土を研究する人々はよく本經の十八圓滿の淨土に注意するが、更に遡源的に華嚴經所說の淨土が研究されなければならない。曇鸞大師が論註に淨土十七種莊嚴の第三性功德成就の性の

語義について如來性起品を引きたまふは指針となすべき見解である。

五、序論に述べしが如く解深密經が清辯等の中觀學派の論書に經證として認められないものがあるのは創作の跡極めて顯著なるものがあるためでないであらうか。

解深密經成立構造の研究（或は、解深密經に於ける佛身思想の研究と名づけ、或は、佛教經典に於ける根本性格の研究とも名づく）  
終。

#### 附記

註記の科判は紙數の制限の關係上割愛した。解深密經之研究が完成し、公刊に惠まるゝ日に補ふことを約することゝしよう。

本論文の結論に於て、序品が華嚴經離世間に依ることを論述したが、既に發表した大谷大學研究年報、第二輯の拙論に於て、それが論を改めてゐる。

因に、分別瑜伽品の基本敎説が小乘瑜伽師の經説に據ることを論證し得るのであるが、それは他日稿を改めて論述したい。